



十福為象抄
終

5
6629
3止



八五
6629
3止

十編の辨お終



才八段

渡部 ね編

中身以上 按するに中身の上とて或は武家の
人くといひ或は他家源道の人とて一々
ゆきたるの体といひあはれあつたりしるやまきと家
名を住むの詞あたりしけりけりも身もかた
さりと町人百姓とていふ榮耀の家とて
家業とてあるを面くの頁加ちるに柳も天理の
ちくとていふ十家盤の指しぬとの爪とかけ鉄
鐔の柄も府將とていふに和斉連系にあり
て皇玉の久遠のちをいふ言りのきといふ

4318
除籍
3

子孫下

これと孔子も未だ記し説のい興放詩立放
礼成放樂民可使由之不可使知之今之意
よふ時へ禁中し和音の連音のり理世安民の
代よりいふ家殿上の代とあるは僧家朝奏
暮誦のいしく衣冠とありこれ後とありて天井
地祇とありけむとやまゝ和音も若くも下
大平の結あるは庶民のあやをそとむむに
おこあへい子遊うそまゝ孫子の忠告あり
まゝてきえ舞のに美とまゝまゝりひれり
行へど由之とて脩己以敬さるる子道の人は
信し徳ありけむけ辯の大略い先後おし論り
民由の章孔子曰と衍文とて由之とい前詩礼

樂ありけむと事行り由此理とつらむに何の
むらうもやなとけむら何のやうも

中以下 遺稿夜話一ある日本曾寺の奉詔
し故君のそへ人ありて徳借とあり何のあり
向むむに信詔奉詔とあるありと奉詔ま
けらぬとて道の徳もい似るは徳の寂然
不動といひ徳の寂滅ありとていむ徳詔の
名もあつてありは道と中以下よはて
中以下は風雅と道守の教ももを殿の理
とありて阿含上人とてありのよ内秘外現の
はありんやゆて孔子の徳徳を世にのち用
といひありて下字而上達知我者其天季

子孫下

つゝ但漏るるも是非とありて我人も
世ともふれとる者昔者塔の月用あはれと女子
童部も下ありたれと王道よ上達をじと
ありつとれははるる我氏の世の因縁と
もさるるに老子の塵可のさる者として
孔内よけ世にあれは論語の言行と鑑して文章
はたの塵可よあらし教誡とたの表裏と
とつたる道よあらしとらむはれと柳下惠
とそあ人のさる者といふ道よ家々の
さ地あらしと我にさる者といふ子張
神もさるるといふとらむはれと中捨
はしつたるちる者神主人よりた又條の式と

修へし俳諧の道の才一は後談平詔のけ詔
ありらるるは詔の詠あしとてこれの建訓
いあらしとあらしの例の予さるるはさるる
あしれ入るるは我の才よ家々のけ詔といふ言詔不到
のふあらしにさるにけは子のけ詔と辨といふも入る
もさるるをさるるは難易のけ詔といふとさるる
て其の才よ家々の傳ちるるは子のけ詔といふ
我の才よ家々のけ詔の言詔と耻といふ也
洛陽の土 遺稿後詔といふは漢賦の落柿金に
あらしつて漢のけ詔といふは漢のけ詔といふ
とあけまらるるはけ詔のけ詔といふは漢のけ詔といふ
京の地よあらしつたるけ詔のけ詔といふは漢のけ詔といふ

丁大振のからしむるやうなるに山葵のからし
の金ついでいりる句を例の似而非あんにけねし
おまの人ありて人の存をいとばいれり一剛も
柔あとも能く今日の中は活あるともさうい
けりさう落押舎の誦中とありて著者の名
録に入つてしる

作意 遺稿類説より七何如の西林兼庵より
續猿蓑の撰は柔あうに武雄のくくより
者句とらるれり中其角もこの章ありて
秋風辞と裁へる句に中よりそのをらよ
い下りよと我も人も感してこれのよは
及びきよとさなる例のちあふる昔子

けりし能くとまげの玉振金ぬの作とりて
天下の人と發するもさうなり又その事化と
なりて二作とわらるる事とさうし二作は
かゝる能くはまきしとす自己とまきし
となすこと一西化ありて一海やみ事と
ちりておくの作とさるる

三作 いまもや新眼肉のめく衣
三作 懺ふる者のまなやと牡丹

いふに雉尾ぬきいひ之上時とさ佳おりの
者句とあげて曲節の論あり早意いさし
さういへ句作の用とる用ととらる

雅俗 雅俗といふ意の誤あり或は頼政の事也

諄シと哀アハレと雅ヤカとシ直チカとシ依ヨありニれルと意イの
雅ヤカ依ヨとシいハ或ハりハ肥ヒてハ累ツるハ一ハとシ上ウ廟ミヤの
いハつクるハ依ヨ諸シヨありニ疲ヒてハ一ハけハありニとシ雅ヤカ言コト
ありニれルとシ詞ジのハ雅ヤカ依ヨとシ不フ十シウ段タンのハ辨ヘンとシ言コト人ニにハ

傳曰

乎カ人ニ言コト語コト 傳ツとシるハにハ言コト語コトのハ二ニ子シのハ十シウ篇ペン一ハ部ブの
大オホいハふハんハ二ニ子シのハ言コトもモ信シんハもモあアらハりハお
いハふハはハいハもモ言コトとシてハ一ハ記キとシてハ一ハ言コトとシてハ人ニと
をアりニてハ言コトとシてハ言コトのハ用ヨウとシてハ言コトとシてハ人ニと
とシてハ言コトとシてハ人ニとシてハ言コトとシてハ言コトとシてハ人ニと
認シんハとシてハ言コトとシてハ言コトとシてハ言コトとシてハ言コトとシてハ人ニと
のハ言コトとシてハ言コトとシてハ言コトとシてハ言コトとシてハ言コトとシてハ人ニと

とシてハ天テン地チとシてハ人ニとシてハ一ハ言コトのハ好コト惡アクあるハあり
辨ヘンとシてハ二ニ子シのハ天テン地チとシてハ言コトもモ言コトとシてハ言コトとシてハ人ニと
辨ヘンとシてハ二ニ子シのハ天テン地チとシてハ言コトもモ言コトとシてハ言コトとシてハ人ニと
至シ不フ喜キ今イマ夫コノ子シ得エ位イ而シテ喜キ何ナニ也ヤ 孔子コノのハ答コタヘ
いハ今イマのハ詞ジありニ卷クワン末マツのハ解トクとシてハ一ハ言コトとシてハ仲チュウ由ユいハ
虚ウソ言コトのハ言コトとシてハ顔ゲン色シキのハ喜キ怒イとシてハ言コトとシてハ人ニと
にハ孔子コノのハ削セツのハ隠インとシてハ言コトとシてハ言コトとシてハ言コトとシてハ人ニと
のハ言コトとシてハ言コトとシてハ言コトとシてハ言コトとシてハ言コトとシてハ人ニと
隱イン乎カ吾ガ無ム隱イン乎カ爾ニ吾ガ無ム行コト而シテ不フ言コトとシてハ二ニ子シ
者ハ是コト丘キウ也ヤ 先後抄シヤウにハ論ロン語コのハ言コトとシてハ言コトとシてハ言コトとシてハ人ニと
いハ道ダウのハ無ム隱インとシてハ言コトとシてハ言コトとシてハ言コトとシてハ人ニと

一子相傳の秘了もあんな孔子の道と云うて天
何とう思ふて一をせしめて是丘の詔使と云はれ
論語の文章と圖の所もあんなに二子
と共うする地とをよといふ詔の相傳のよ
位とわづらむれん程く位と先てた
れかあり七卷の喜怒哀楽も何とて其
のありあんなれと思ふて思ふるも
眼横鼻直ちりやたてく此の七十二
和漢の或方の論語も論語はけ段と
あゝ人よむらて段とあゝ人よ親と
あゝ子と親とあゝも子と親の事
いゝたれと云ふとさういふも
畢

意と詞とあゝいゝかゝる思ふとあ
孔子とあゝ陳司敗と向るや昭公の
とあゝいゝ段とあゝ子とあゝ親と
之をみ希いさもてあゝ夫子の
是丘の自慢とあゝいゝ陽貨の
て女子とあゝ人よ難養也近之則不孫遠之
則怨とあゝいゝ人の常詔とあゝいゝ女子
の急用とあゝいゝこれとあゝ詔とあゝいゝ
あゝいゝ孔子とあゝいゝの骨とあゝいゝこれとあゝ例の
朱往とあゝ君子之於臣事慈以去田之則無二
高憲とあゝ近之とあゝいゝ子とあゝいゝ慈愛の
あゝいゝやかくいゝれ子とあゝいゝ

夫子ははねてつらうと暮らひのふら女子といふく
不孫あらぬよこのと拍のうらたれりあく陽
かひての歎息あふん或書くし妻の不孫と傳へ
転と播盤珠のそくく中ひと美盤珠のそく
終と仰頂珠のそくく善とさくもたれん近
あつり悪とさくさく遠くうむむとさく色歌の
いやうさうて園睡の符はくらへ中ひ此言は
はらう此書人賢人もかくらりあつらひのそ
はらうこれ言詠の辨よつらう女子の評論と尚
あれと拍とつらうと神と持たうて言ふ男女の
天性とさく此書のせはよめさくはらう下
のあつらうと拍と陽とつらうとさく

の餅とつらうと事とよめさくはらうとさく
七辨とつらうと能言の言詠のさくさく
言行違 世評と遺言の五秘あれ十論とさく
世とひひつらうと秘とつらうとさく
はらうと移の遺言とつらうと後とさくありけし十論と
傳とつらうと言行の評とつらうと部の大節とつらうと道く
の建とつらうと世の真廢とつらうとつらうとつらうとつらうと
つらうとつらうとつらうとつらうとつらうとつらうとつらうと
つらうとつらうとつらうとつらうとつらうとつらうとつらうと
建とつらうとつらうとつらうとつらうとつらうとつらうとつらうと
のせはつらうと諫臣争子の喩とつらうと天下の一助
さくつらうとつらうとつらうとつらうとつらうとつらうとつらうと
の誹語とつらうと

の譽は名よきものなり史記に訛諫のむ懐と失つた
世のきんまきなき放逸の人此に結のあはさるる
抑りてやもされいふ僕らり誹諆停止のゆは
もかろいむらうをく我々のあけくちらちるは雅
の兄弟とありてはる音連歌の人くはれは誹諆
の詞りて下音の度子よりあされんる利
よとら遺恨あはれんやちらとて今に能言
以貴玉人とてり孔子の玄詔と指ははる儒
仰の人の賜とらり詩歌の人此勝とくくらん
淮陰侯の勇力氣なりも孟之及の殿方よの
なととおまのさ地りて道くの建さるは徳と
はくきむとてあらりてまはるるあるあは

抑り天倫の次才ありてはる音連能とあはむ時と
音書と詩孫の風論よりなり連歌ははる音
の優りたりなりて能言の手詔ちりて家の
徳よりなりといふ言とて世の建誠りて力のあは
とされされりやちり言りの違りてはる音
力の意の詔ありてはる音の意もあはるる
はる音のあはるるや儒家もはれとあはる
過行りて意のあはるるは評とかの聖人の
はる音の愚禿のあはるるといふてはる音
徳文よひてはる音の行のあはるるは徳
の結文とある一りてはる音の徳のあはるる
孔子もけ行とてはる音の徳則不孫儉則固

るはる

徳則不孫儉則固

與_二其_一不_レ孫也寧_口周_レと_レ不_レ意を_レ律_レト_レ不_レ乃_レ也_レ初_レえ_レあ_レく_レく_レ我_レの_レあ_レく_レと_レま_レは_レも_レや_レは_レら_レく_レ遠_レ誠_二の_一要_レと_レを_レあ_レに_レ子_レ道_二の_一人_レを_レる_レを_レた_レと_レす_レて_レら_レは_レも_レい_レい_レ意_レも_レち_レり_レと_レも_レあ_レら_レひ_レか_レく_レと_レの_レ例_二は_一訣_二言_一の_レ微_二中_一な_レく_レ一_レ篇_二は_一万_レ人_二の_一肝_二と_レ対_二と_レす_レト_レ百_レ世_二の_一虚_レ誕_二と_レす_レの_レり_レち_レら_レる_レ十_レ論_二一_レ部_二の_一親_レ切_二ト_レも_レ一_レ人_二と_レく_レま_レと_レ信_二と_レく_レ我_レと_レま_レと_レ辨_二と_レす_レん_レや_レく_レと_レも_レし_レと_レ過_二と_レく_レ我_レと_レは_レ辨_二と_レ耻_一と_レあり

才九段

變化 一子録は變化と天地のを知りて不_レを_レみ_レず

い_レち_レや_レう_レら_レあ_レも_レと_レ變_レ者_レ謂_レ自_レ有_レ而_レ無_レ化_レ者_レ謂_レ自_レ無_レ而_レ有_レと_レや_レ海_二の_一變化_二の_一さ_レら_レる_レか_レく_レも_レ迅_レ雷_二疾_レ風_一の_レあ_レれ_レ射_レと_レも_レ人_レ君子_二も_レ射_二と_レす_レト_レ神_二や_レ仰_二と_レ敬_二と_レる_レの_レか_レを_レま_レら_レん_レ天地_二の_一変_レ化_二と_レす_レら_レう_レら_レの_レ人_レ間_二世_一に_レ變_レ化_二と_レす_レと_レも_レ人_レと_レい_レひ_レ變_レ化_二と_レす_レら_レぬ_レと_レ愚_レ人_二と_レい_レふ_レと_レも_レ驚_レ不_レ驚_レの_レ出_レづ_レト_レ一_レ文_二と_レす_レら_レと_レ海_二の_一い_レひ_レ也_レ他_レ例_二を_レる_レト_レ一_レ今_レの_レ變_レ化_二と_レい_レふ_レて_レ今_レの_レ言_二決_二と_レる_レ也_レ定_二趣_一向_二法_一 白_二馬_一條_二目_二の_一名_二と_レ執_二中_一法_二と_レす_レと_レ書_レ經_二の_一執_二殿_{中_二の_一う_レめ_二之_一儒_二書_一も_レ仰_レ指_レし_レ信_レ者_二も_レ書_二を_レ會_二し_レや_レ一_レ人_レ間_二の_一世_二と_レす_レる_レも_レ常_レと_レを_レ花_二中_一と_レす_レる_レか_レく_レ定_二と_レん_レれ_レ十_レ里_二と_レす_レら_レの_レ中_二に}

きしりてふない近くへんやとてああり中もや教する
のみよ巻し巻巖孫と中よりりて所言は巻と
ふねよとてりりんまや源中の子平帖し復た巻
と中よとてりり桐壺雲限とありてはくうの復
転向を先よりて句作を後ちりてとある一とて
誠よ今の能潜所り転向と句作よのちいといと
てゆてお句のつとといお句の用とよ差ふ
ありて早きとるるゆとて理窟よの記をれ
孫よ水仲の命とてあれまよとありてはくうの
かてり自己の権梅の権梅あてりて世向のく
而のうかて而のうかてとて一とて遺稿の語
よとけよありむりてはるよ供をれて河の新坪

源中

帖

とよありて一節お教のありて権梅のありて
よ人く事ありてりておその句作よるまよと
の守らとてりりかてりりての権梅のありて
のちとてりりてりりてりりてりりてりり
論議の多識とてりりてりりてりりてりり
文とてりりてりりてりりてりりてりり
もそのりりてりりてりりてりりてりり
のちとてりりてりりてりりてりりてりり
孫よの時よけ附とてりりてりりてりり
とてりりてりりてりりてりりてりり
わらひてりりてりりてりりてりりてりり
ありてりりてりりてりりてりりてりり

源中

帖

あつにさうくの内さあつとりになるのさう我
 と能造しあつたつてさうとせあつたつてさう
 所名とすあつたつたつたの所名とすさう及つて
 それと随類得解といひて枝縁の時あつたつ
 決つてあつたつたつたつたつたつたつたつ
 とつらつたつたつたつたつたつたつたつたつ
 悟易迷難とつたつたつたつたつたつたつたつ
 附合しやつたつたつたつたつたつたつたつたつ
 ちもあつたつたつたつたつたつたつたつたつ
 やあつたつたつたつたつたつたつたつたつたつ
 下さうさうとつたつたつたつたつたつたつたつ
 とつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつ

と耻しつたつたつたつたつたつたつたつたつ
 五老井にあつたつたつたつたつたつたつたつ
 おつたつたつたつたつたつたつたつたつたつ
 是れさうとつたつたつたつたつたつたつたつ
 又さうとつたつたつたつたつたつたつたつたつ
 さうとつたつたつたつたつたつたつたつたつ
 たりつたつたつたつたつたつたつたつたつたつ
 差つたつたつたつたつたつたつたつたつたつ
 即ちつたつたつたつたつたつたつたつたつたつ
 いらつたつたつたつたつたつたつたつたつたつ
 漢し又さうとつたつたつたつたつたつたつたつ
 のつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつ

あやの裁也(句)はのいよはにさるるなりこれに
 例の差ふのと論さるる事ぬ裁の所を(句)とす
 趣向(句)は(句)がら(句)は(句)句作あり(句)奥方の裁也
 はの意に趣向(句)して(句)さるる(句)句作(句)句作
 と(句)あ(句)と(句)二(句)句の(句)整(句)して(句)又(句)は(句)の(句)鎖(句)詞(句)して(句)
 ち(句)さ(句)ら(句)連(句)絶(句)は(句)所(句)り(句)て(句)又(句)ま(句)は(句)は(句)ら(句)り(句)て(句)
 句(句)は(句)の(句)名(句)同(句)ら(句)せ(句)り(句)あ(句)ら(句)る(句)は(句)語(句)り(句)て(句)も(句)
 つ(句)と(句)さ(句)の(句)道(句)と(句)さ(句)ら(句)る(句)も(句)た(句)と(句)一(句)句(句)の(句)
 尾(句)躰(句)も(句)つ(句)り(句)て(句)次(句)の(句)句(句)せ(句)ら(句)る(句)も(句)趣(句)向(句)は(句)句
 の(句)意(句)と(句)あ(句)れ(句)て(句)か(句)句(句)の(句)お(句)は(句)さ(句)と(句)ら(句)り(句)て(句)句(句)作
 は(句)句(句)の(句)も(句)と(句)さ(句)ら(句)る(句)も(句)句(句)の(句)お(句)は(句)さ(句)と(句)ら(句)る(句)も(句)
 一(句)趣(句)向(句)は(句)句(句)の(句)お(句)は(句)さ(句)と(句)ら(句)る(句)も(句)句(句)の(句)お(句)は(句)さ(句)と(句)ら(句)る(句)も(句)

り(句)の(句)お(句)は(句)さ(句)と(句)ら(句)る(句)も(句)句(句)の(句)お(句)は(句)さ(句)と(句)ら(句)る(句)も(句)
 一(句)趣(句)向(句)は(句)句(句)の(句)お(句)は(句)さ(句)と(句)ら(句)る(句)も(句)句(句)の(句)お(句)は(句)さ(句)と(句)ら(句)る(句)も(句)
 一(句)趣(句)向(句)は(句)句(句)の(句)お(句)は(句)さ(句)と(句)ら(句)る(句)も(句)句(句)の(句)お(句)は(句)さ(句)と(句)ら(句)る(句)も(句)
 一(句)趣(句)向(句)は(句)句(句)の(句)お(句)は(句)さ(句)と(句)ら(句)る(句)も(句)句(句)の(句)お(句)は(句)さ(句)と(句)ら(句)る(句)も(句)
 一(句)趣(句)向(句)は(句)句(句)の(句)お(句)は(句)さ(句)と(句)ら(句)る(句)も(句)句(句)の(句)お(句)は(句)さ(句)と(句)ら(句)る(句)も(句)
 一(句)趣(句)向(句)は(句)句(句)の(句)お(句)は(句)さ(句)と(句)ら(句)る(句)も(句)句(句)の(句)お(句)は(句)さ(句)と(句)ら(句)る(句)も(句)
 一(句)趣(句)向(句)は(句)句(句)の(句)お(句)は(句)さ(句)と(句)ら(句)る(句)も(句)句(句)の(句)お(句)は(句)さ(句)と(句)ら(句)る(句)も(句)
 一(句)趣(句)向(句)は(句)句(句)の(句)お(句)は(句)さ(句)と(句)ら(句)る(句)も(句)句(句)の(句)お(句)は(句)さ(句)と(句)ら(句)る(句)も(句)
 一(句)趣(句)向(句)は(句)句(句)の(句)お(句)は(句)さ(句)と(句)ら(句)る(句)も(句)句(句)の(句)お(句)は(句)さ(句)と(句)ら(句)る(句)も(句)
 一(句)趣(句)向(句)は(句)句(句)の(句)お(句)は(句)さ(句)と(句)ら(句)る(句)も(句)句(句)の(句)お(句)は(句)さ(句)と(句)ら(句)る(句)も(句)

和語之連歌

和語之連歌 其端書とち行らざるも和歌の
亦よくいへばなり 讀みし世に後の用不用に未
の解にふるさつとちふるさとまほやくまはるく連佛
を照しのひのありて或は連歌之和語に歌或
和語とく連歌とていへばそは漢語の文ある
ことく連佛の語をもあること一とては格は
連佛の對ち連歌よりさういひ連佛の句を和語と
ちくまはしと和漢文撰といふあり

拵

拵 拵はたゞの格ありは詞の禪録といふ
とめらん此もたゞの格 吾等の世に和歌と
といへば和歌とていふ人といふ所合の微細あり
とすてて男はけ女はとてけとて拵はたゞの物

唯心の所造より拵も見難入るゝさかむ
はらゝか我のこかくるゝか合らありあつち
えんを膾炙し我もあつくふ向の妙の眼の深
ても男もけ女も人物のありあつち衣衣の格採
もんありやあつち所合の格向とてあつち向の中
あつちつらけ向作とて向の用とてその約は約
一字も一語もあつちあることありけりも是に論
ひ可合ふのこと子と結文とのちて眼の妙す
いけ此ある卷の件とて被と結とつちあつち
ありけ向は拵とのたつちつちの所向も
ある一は拵に微細とて懐の筆とて拵とては
の婦はあつちつちのちとて大なることあり

あし降るららけけとほるうらあまのひる
らんあねららく諸便しんらん
一字におとほあまの趣向し向分し
ちい衣裳のひそまじりてさ
そのらけ類のひそまじりてさ
水と乳きいていあひんを
知り種物と乳きいていあひんを
同むつうく服らあふじん
ぬ衣裳の借るるとらせ
あふはららふれあふの舞
何とあふはららふれあふの舞
あふはららふれあふの舞
あふはららふれあふの舞

わへん五の世親も趣向とあふの中はあつて
向作らあふのまじりてさ
何とあふはららふれあふの舞
あふはららふれあふの舞
あふはららふれあふの舞
^知程け二字とアれぬ用のて
ソい儒けの知識といふ附論の二
おふてあふの程とあふの程
鯉のらけに魚の演説してき
あふはららふれあふの舞
あふはららふれあふの舞
あふはららふれあふの舞

やうに二汁を鮑の湯にまきよんじ類のきい丹
も海老の卵も曲岸をまねてけの撰おうして
越向のくそらうとがくのそくそと二種のきい丹

狐諧明暗

祥林隨子にある和尙の坐禪の時、野
狐の妖怪とあつた方に一唱とつゝ一息のあふ消失
さうして其のおおあゝく典座とあつたやうに例
の一唱とつゝ一息の狐のあゝくそくそらうに
おあゝのうらおあゝ一唱とつゝ一息のあゝの暗と
おあゝのうらおあゝのあゝのあゝのあゝの徹と
未徹ありまねた風流とあゝあゝ一息の狐のあゝ
てまはちちとやききと一息の和尙の一唱とつゝ一息の
くあゝとつゝ一息の二唱のおあゝとつゝ一人とつゝ一息の

ふ地あつたはゝ狐諧の信不信とあゝ

遺稿

遺稿夜話よ之祿のたゝめ奥おのれりよ
古書にね系と撰つて湖南より武のききとつゝ
おあゝの遺書よ文章の例のあゝのあゝと其角
も昆書とあゝつて作れし他人の能論のあゝの
へ自己の能用の勝つてはゝんおあゝとつゝ例の
起括あり走とつゝ例の振子ありつゝつゝつゝ別を
あゝのあゝあゝつて聲とつゝあゝのあゝのあゝのあゝ
あゝ二句の向ふつゝおあゝとつゝおあゝのあゝのあゝ
能論のあゝのあゝつてつゝつゝ一息のあゝのあゝの
附合のあゝも不命のあゝもまじらぬ能論のあゝの
自己の先作とつゝあゝつてつゝあゝのあゝのあゝのあゝ

尊く二座のふゆとわらひしむらゐの眞如
 もあまのりしむらゐは水のほはあれは
 一と傳のれとさるゑと又刑のやと罪ゆ
 一とあつけおのふく物子庵よとさし
 行人の遺誠とて我の津よけ後誅の厲言と
 ありの聲とて所合のや用あはれ物子とを親
 のちいふもあつたあつちよ一にめるとさ
 一他人の能福と自己の能福とに我師の能福
 と臨終とむとや神意の眼力も今もあつた
發句信 我師の常談よお向のよへ物もあつた
 所向の變化よ自在ちりよいなるの在世よ十信あ
 むけりよ下のみさくも古老の授よとさり

一 謙語の理の處の序らさるゑあつた今より
 年とさるゑ上よも人もせらるゑもやま
 者向のよらなるの在世よ能福とてあつた
 情と失つたもあつたあつた所向のよ能福
 あつた上よとさるゑもあつた今より
 ちるを達するも今の変化のよやあつた
 言よ能福の時世難ちるとさるゑもあつた
 老らるゑあつた所向の能福もあつた
 月書もあつた調の能福もあつた
 今とあつたあつたあつた今
 今の世さるゑもあつたあつた
 今とあつたあつたあつた

百餘の下

わかれ人とおぼえりてはるるをわかれの世の境
廻りて朝のこころに御座りてはるるをわかれの世
もまじりてはるるをわかれの世の境
及びわかれの下の又ふりてはるるをわかれの世
の境とわかれの境とわかれの世の境
と信じて一し今のおもひはるるをわかれの世
まじりてはるるをわかれの世の境
さしよ、本自の香とてはるるをわかれの世の境
て是深微の境とてはるるをわかれの世の境
をわかれの世の境とてはるるをわかれの世の境
干あらしむる。魚のわかれの境とてはるるをわかれの世の境
の作はるるの境とてはるるをわかれの世の境

言ひてはるるをわかれの世の境
さしよとてはるるをわかれの世の境
一道建立の之をわかれの世の境
るるは他とてはるるをわかれの世の境
歳旦とてはるるをわかれの世の境
の判るるの下の境とてはるるをわかれの世の境
お念趣向 接ぎらるるはるるをわかれの世の境
が減ありてはるるをわかれの世の境
いふふとてはるるをわかれの世の境
いふふとてはるるをわかれの世の境
人の向ふとてはるるをわかれの世の境
いふふとてはるるをわかれの世の境

動破りてゆきの勢向一きくふうとていふか
 分ふの園と透ねまき一
 一庭調子 接まらば天地の運行より人の力帯の
 浮沈もろ流らるやうして世の上も下もいさか
 いちの振子あねの附句も二つの運連とらるま
 一し流るるまらるるやうにちかちか場の人を
 ちかちかよらるるとして 祀るる寶けしよのふ
 一し一連行の最後よこまのあうまねの能の舞
 向し附句も二つの調子とらるまき一し池のちよれ
 一しついでちよれいふちよれ向し耳は徹さるるちよれと
 舞のちよれちよれまらるる一穀とて枝指のまき
 傳曰

東西二名 接まらばに成段と張子章の文論よりして
 始終の用よりあるものいふに 凡雅の始終の二と
 一しにかの文教の用あねといえ 祿中の竹符より
 けたるの以書ありちかちか符の大略よりて先師の
 新鑄古文は事とありて 張子章よりて 銘の道
 始中終のこといふに 西より乾坤の二體とて
 東より 戲言 戲動といふに 一むむとていふに 心性の
 一しはのちよれ一し凡雅の文といふに 一しはれは
 崇依より子と文といふに 禹王の存といふに 一し
 父のちよれといふに 昔酒の二まといふに 文といふに 一し
 用あねといふに 曾参も存のちよれといふに 婦人全
 者 曾参也 頃令者 伯奇也 一しはれは 一しはれは 一しはれは

古今類聚

三十一

拍

書一と孔子の詞の親切とよめる、公孫季と
りりて文のよるはあり、その二は、細くもに
一子も古文の判りあり、一と我をあらわすの
おとなく文教の用りて文よ、可く詞の用とれ
とあり、文質の偏を新鶴、
拍子、
乃口意のことよ、
あへ口の拍子よ、人をや、け、
とまる、
い、
世の拍子よ、
東

舞向より、
酒食の雑話、
一と、
草の百韻の曲の節、
こと、
多と、
詞の、
は、

古今類聚

三十一

とよから一向とあり、昔は博覧の作を、
世界の人の志あるより、一もは、
むと、いふ、
おとら、
いふ、
言や、
ち、
かく、
て、
熟、
ま、
さ、

泊船、
い、
と、
論、
え、
先、
言、
朱、

○子曰由也女聞六言六蔽矣乎對曰
未也

抄云此章廢續前之佛胎而有所見一章之文勢
了共就夫而之教誡也則作別章廢文之一法也

乃孫少下

七三

居吾語

居吾語女好仁不好學其蔽也愚好知

不好學其蔽也蕩好信不好學其蔽也

賊抄云仁知信之三言者儒書云佛經云

好直不好學其蔽也絞好勇不好學其

蔽也乱好剛不好學其蔽也狂剛之直勇

者此章之要文也左有者六所有好學之二字而可見

子路一人之誠厚諸註者先仁知信而後直勇剛了則

昨日之子游麼今日之子路麼成不替寺之談美

小子何莫學夫子詩

折云此限有全續前章而尤
之二字者及行文至乎小子者指子路詞而亦語余
廢如小子語之言則親切之平語也季然則從公山弗擾
至此章迄者下同一論之文勢公山弗擾
章由也之段者實讀一章二段公山夫

詩可以興

○朱曰感發志氣○折云朱註者非詩經之
之法談公山與者詩之比興也詩者從志而可興而
遊也其詩者朱氏廢為註止乎為志六義之賦比興而

可以觀

○朱曰考見得失○折云朱註非詩經之用謂塵劫
在茫茫乎而可觀念四季之變感懷万物之化與所未
者自以觀感之二字令註論語之政刑止乎今據為忘或如何
厥者不察其人之用字
面之註者與者此謂也

可以群

○朱曰和而不流○折云和而與者詩經之註也不流
與者朱氏之依言也是以所謂註者之塩梅了矣
群與者万物之和同而可知凡雅之不隔貴賤止儒內者以之
可竟仁居武存者以之曰文和歷文和者必為子路之用厚
註者有認實字之名而為廢以仁知
信設詩經則世云抄子之定規也

可以怨

○朱曰怨而不怒○抄云朱註廢至此段之不怒而見事
直論語者也孰能有不怒之意耶沒以廢可悔者本朝流布
之論語而朱喜集註之無以雅也至其怨者詞之哀動也抑曰

以雅之大事乃若知詩麼以一言而覆之與哉此歌麼以一言而
 無遺方然情了則天地麼動之鬼神麼哀之增而神佛之
 正直也了教不成焉之一粟何麼然則不憐給正耶焉書
 于像車物然止麼不所謂今之哀動耶是故詩麼歌麼知可
 以怨道理了哉在在則于孟子何麼有此意而所謂舜者豈天
 然之象了則未註者何之不知然也然則然也然則然也然則
 厚自他然與象止乎文章今者無尤樣之斷篇唯然者
 其親之意也然之一字者在孰回而麼焉竟西居事也
 者免今麼角今麼虛實之不自在也乎初謂地之畢
 竟之者與群之遊有詩之子之常而所放方人修目也則子路
 今者教觀然之哀而所和給武士之心可察其自其人之
 用詩者好顯孔子之筆刪而將仰風雅之大祖麼是也
 通之事父士遠之事君○朱曰人倫之道詩無不備二
 例之不及言其舉重之二字有九麼有采介也言此段之用則
 通遠之二字有無用之用而論語有將註文於先社可謂
 論語之註者自書了尤在共兩處如有之子不通漢
 語程者分明難言假令言其推量之沙決也其狀
 多識於鳥獸草木之名○朱曰其緒餘又足見其

註之先後乎詩身者才二覺花鳥之名而樂而可觀哀而
 可然厚學之士者所覺道之猶餘也至或時者勸曾子有
 子而宜結首階則字文居此時者魯子路一人而行之
 麼山觀元也則宜結先覺花鳥之名次作詩書文博好學向歷
 况見家語之好生了則稱詩雅之固唯與鹿鳴而石鳥獸
 之名增之固不可行與者有加朱公受子者而欲破詩之優
 游故小言寧道遺遺結此誠居矣何推者拾物之本而比魚者然
 知之末也則于月于雪于花于鳥不寧四季之優情猿猴豈知
 今日之孔子多知今日之子路則今日謂論語之註者哉矣
 論語者可不視之觀之安承之矣耶蓋多字者血大首之
 義而或謂適也
 之訓也

第十段

聖典旋 孟子曰舜由仁義行非行仁義之大道
 以仁行仁以義行義之道一也其於仁義之

てとんと仁義と礼をもちつるにききずいせしむる
とちりてはとがまふらんあむははむむ人そ
とありけれん先後おし由と行ふの差あるはれ
手の下に全文とくろく一とあるは末の世に政の上
の費と下にたかくあひ下と一金の賂とく一金の
上とがまむとく一とくといふ民とくいれとをま
ひよくうに大道廢有に義とく一とくせしむ
なり頭今と目しとく一とく耳しとく一とく
ぬうく一とく徳宗のにんときとく一とく武の
厲言とく一とく天十のときとく一とくあつとく一とく
かく様同し西とく一とく一とく一とく一とく一とく
あんけりれ子の又刑解し繩之以刑是謂焉

民設弁而陷之とく一とく今とく一とく鄭の子とく
寛政極政のまきとく一とく一とく一とく一とく一とく
されし徳宗の世にちり終末の中これ節とく一とく
せくしとく一とく一とく一とく一とく一とく一とく
物ん一とく一とく一とく一とく一とく一とく一とく
そ代のけとく一とく世界の徳とく一とく一とく一とく
は式のるれとく一とく其意地とく一とく一とく一とく
今覚古明 接するにけ殿といふうに古をとく一とく
くろ不あり今覚とく一とく一とく一とく一とく一とく
いふとく一とく一とく一とく一とく一とく一とく一とく
一とく一とく一とく一とく一とく一とく一とく一とく
一とく一とく一とく一とく一とく一とく一とく一とく
一とく一とく一とく一とく一とく一とく一とく一とく

る

た

の言詠とまのふりこきこまはな郎あひこしに
後一ちり(さ)とやけちよ醫者の博字(う)とよ
とこり(さ)の二おありわして能活い(ま)活あれい
そよみとよ上の化舞(う)てよよの西施(う)肩(う)よ
あひ(う)とよ無鹽(う)と紅(う)とこつとよとよと
あひ(う)あひ(う)とよの能活(う)とよとよとよの(う)と
とこり(さ)とよとよとよ

發句切字 世もく(げ)段の條目と我家の秘訣
て(う)波(う)お(う)付(う)のは(う)あ(う)れ(う)い(う)と(う)の(う)子(う)申(う)の(う)要(う)文(う)と
あ(う)り(う)て(う)百(う)世(う)の(う)血(う)脈(う)の(う)き(う)こ(う)れ(う)ん(う)と(う)い(う)じ(う)と(う)い(う)子(う)路(う)
と(う)静(う)思(う)不(う)食(う)以(う)至(う)曾(う)立(う)と(う)や(う)今(う)の(う)覆(う)食(う)以(う)
そ(う)と(う)ら(う)く(う)の(う)人(う)あ(う)ら(う)と(う)れ(う)と(う)能(う)活(う)の(う)ま(う)文(う)現(う)て

頃と句とてく(う)角(う)と(う)ん(う)く(う)と(う)や(う)く(う)牛(う)ら(う)ら(う)と(う)と
角(う)と(う)一(う)一(う)發(う)句(う)の(う)切(う)字(う)の(う)子(う)一(う)條(う)云(う)切(う)字(う)と(う)と
美(う)の(う)美(う)あり(う)万(う)物(う)の(う)一(う)と(う)と(う)一(う)と(う)と(う)り(う)く(う)お(う)對(う)と(う)れ(う)い
て(う)成(う)る(う)も(う)一(う)と(う)と(う)一(う)と(う)と(う)て(う)括(う)あ(う)れ(う)と(う)と(う)二(う)の(う)次(う)に
て(う)次(う)あり(う)う(う)故(う)あり(う)れ(う)と(う)子(う)と(う)つ(う)い(う)代(う)の(う)ん(う)と
ある(う)一(う)一(う)條(う)の(う)韻(う)字(う)の(う)子(う)一(う)條(う)云(う)韻(う)字(う)と(う)と
決定(う)の(う)美(う)あり(う)在(う)や(う)も(う)各(う)句(う)と(う)り(う)句(う)同(う)中(う)と(う)て(う)に
起(う)定(う)轉(う)合(う)の(う)詩(う)格(う)あり(う)て(う)は(う)家(う)の(う)韻(う)礎(う)と(う)て(う)よ
よ(う)も(う)お(う)と(う)れ(う)く(う)ち(う)り(う)意(う)と(う)お(う)と(う)各(う)句(う)の(う)と(う)く(う)り(う)て(う)ま
形容(う)と(う)一(う)字(う)と(う)一(う)字(う)と(う)り(う)て(う)服(う)と(う)れ(う)く(う)む(う)執(う)中(う)層(う)句(う)未
と(う)り(う)か(う)ら(う)く(う)一(う)と(う)も(う)一(う)と(う)の(う)も(う)お(う)波(う)の(う)子(う)一(う)條(う)云(う)と(う)
本(う)は(う)下(う)よ(う)お(う)ら(う)ち(う)と(う)の(う)美(う)あり(う)と(う)と(う)万(う)物(う)と(う)は(う)と

とつりも五運變化のるにあらはれ之即一りて
者向一やうなるを要として韻子傳格一物
の字も世とや韻子傳とていふありて
と、或るもていふはあり

私云え祿中の軒宿る才之のよ名はりといふ
下に日向月の輝きを何故よとてよ十て子の
係ちあり例のちてけられられけりての板
ちささし梅とらん起を轉合とて新式
あゝねと何故よとていふれ合字のなは
及これの解の法およとていふとて知あり
りといふりちりや夜稿一白馬の大略と辨と
いふ向同のこも條云天教とことりて万物と

と一此教をいひて和合を日向月の音の
成るありていふいふはれ格とて調子格と合
の字もいふとやいふとて古法の式とて清い
起を轉合といふとて追序の曲流とて
能譜の式同といふとていふとていふとて
いふとていふとていふとて一條とて辨の
後勸一者といふ也

▲哉のり来のり梅とらんけとていふ大和詞と字訓
ありて哉はよ多用あり余韻傳和歌の二系と云はり
和と歎とに差ふあれ余韻傳和と詠と通
用あり見永日傳和の詠吟も礼讚のちりぬも
永言の意ありといふとて来といふ従来の意ありて

永言の意ありといふとて来といふ従来の意ありて

一万葉よあましくなり和訓の通果の美に條のす
 條云倭に搦あり漢に牡丹ありける花と二葉の
 ちとけあしるるとさうな花の搦あはれはれと
 搦よけりるもあしと花座傳廿四式云云と
 花よ搦の附方ありけるの美ふとさうな條も
 い好するのふ法もや秘傳をいさうもあはれとせ
 ▲花のすい條云古式より八葉の花あはれ花よ
 いさし一葉ありきとて花大餅花のあはれさの
 手にむしるるをいさしある一はれといふ
 十葉あましくあはれとてあはれとて油色傳
 あはれとていさしある一はれとて比色傳
 けりるるをいさしある一はれとていさしある一はれとて

けの花よの美とと體倒のあつといあれん古式の
 けりるるあはれとて▲指合去嫌のすい條云
 指合とてあはれとてはのりあり沿路の指子の
 さうな去嫌とてあはれとて象物のあはれ竹本鳥獸の
 ちがかり一巻の巻のあはれとていさし古式
 さうなと論をいさしあるとさうなとていさし
 けりるる一とて▲花八月のすい條云花にや
 手にあましく一とて一配も月花を風雅のれ
 亦あはれ又節の比例とてあはれとていさし
 こゝろに新とていさしある一とていさし
 くは月花のあつといはれとていさし
 梅まらけい一とていさしある一とていさし

花座傳
 比色傳

廿四式

の大むねちりり或は玄妙切といひ或は天まうとつふ
おれ知るべしとふはたか一傳 或は舟の切もかま
るも古式に十二の之同あれと神家の後といふの
字も之よりかきり傳 かなあもこ一かきり傳 漢入
哉と哉といふ通用して祢歎と二美とるる射
哉字に二各又用いて傳 畢竟の咏嘆の余韻と
まろし一或は之假切もこ字切も古抄の切はみら
らねがく一傳 或は雜の者句といひ或はまの格
といひ傳 或は季の格といふと貞空子の此は新
格といひ傳 東花式に抄は文ありけのい季の節の
遠見より月花のあつひらけ句漏るくおらとて
金條の設あれといふ中 論の畢竟と千式

返心 白馬教誡訓は神家の二大より世法は返心の
二字あると云ふ一抄にたれと傳書より遠く思
ひといふ仲抄より枝葉といひ此は清うい合點といふ
をいひ傳伝の大とてふも言の北今所と合點とい
世にのを用うといひのら此は清のといふも言の
むいより和漢の博字を返心の二字をいふ
まや依りあつたの表とこのいふ言うよ一抄の
裏とまもてまらぬとちねとまらぬとてまむ入
まを博くそとつとまらぬよとて返と書はら
字をたつたけはなと備法といふ字而不思則罔
思而不學則殆といふるに曾子とてこのめは老

白馬

九

あるかゝるの心入るべく之者吾身がやれ
 う中も傳不習とするゆへに之を以て事あり
 習ふ事とて之を以て事ありたこと夫子の例の言長
 くと吾道一以貫之と曾子の但石見とて
 信し然りたるなるのあつらひ一者とて
 之者たるるなり季文子子の思と新めい
 再斯可矣と例は過不足のあつらひを
 今も好字を言ふと其の事と意とを言へば
 けい言不可以幾と之を以て雅の傳はるる
 事とん蓋有る不而知之作之者我無是也多
 損其善者多見而識之知之次也といふ
 その指ありたるを論説といふ多識のこゝろに

取よ之子の用とするに子路とて之を以て事とす
 下柳揚のさ味の各ふちりたれん言のよれ子
 とて其の速而不作と之を以て事とす今や之思
 の差ふと論をいふは一事にんか一月とて
 耳もて其解れん力もいふは一月とて
 い禽獸のあやゆるとしてこれをもとて之を以て事とす
 の事とて其の事とて見すのあつらひを以て事とす
 字又の自備とていふといふは一字の自備の字を以て事とす
 自縛の備人とていふといふは一字の自縛の字を以て事とす
 信とていふといふといふは一字の信の字を以て事とす
 心合とていふといふは一字の心の字を以て事とす
 一思の終あるは一思とて一思の終あるは一思の終あり

名考

世

ちるちる地と對されんぬのれ此きさうしてこゝちる
おあさうし心されと我らの心さうあ人の心の川は流れ
てうれしうあゝのる心もこころにれ人の心はさ
うんちるさうあちるもさうし根のあちるある目
へ額と執とあひさうけよをのさうとさうし執とあ
例のやちるるに則さるんちるあちるさうあり果ての
今よあさうれく人莫不^シ飲食也^セ解^シ能^ク知^ル味^トとる
飯袋子の漢といけ男ありたれと家法とい庸人
と心はけく心不存^セ慎^ル終^ラ之^ノ規^ト口不吐^ク訓^格之^ノ言^ヲ
見^テ十^ノ富^ト大^ニ而^シ不^レ知^ル所^ノ務^ト從^テ物^ニ知^ル流^ル不^レ知^ル其^ノ所^ノ
執^トと^レい^ハ人^ト知^ル憲^ノのやまれおうて執^ルのさ
名^トと^レい^ハと^レ頓^ル人^トと^レる^ルこ^ノ子^ノ文^トと^レけ^ルの^ノ有^ルと^レる

てはさ連徳の向上といふの遊藝といふはよく
ておと其の書益し若用あれし世界の用よさむ
ことれん商人といふ例の大小くらしく奉るさむ
例の所務とさうし賢者といふ例の所執とさうし
たよくも家といふさうし例の知識といふ一物
の和尙とさむたれしけりと世の論といふ
とれい曾子の月利のさうし為人の諱^ル平^ニ交^ル友^ト
不信^ル平^ニ傳^ル不^レ習^ル平^ニといふ男あんなれ人の性とい
こころといふさうし離^ル專^ルと月とぬるの解^ル曠^ルと耳と
はちゆるとも能^ク諧^ルのさ北^ノ眼^ノ耳^ノ通^ルといふはんといふと
處^ルもの幸^トも博^ク子の都^トといふこ^ノ子^ノ太^ノの言^ハて
例のあさうしと能^ク諧^ルの言^ハを^レい^ハ博^ク子の

徳

世

多文といさぎのちも世代の日用の事とて返して中庸
よりる最しき事し新し河原の事といふものなり
儒術も連記しはしき自己とてさるる事なり
此書見梅もつたけ書見ると全書の書とては横折
の書といふ事ありあはれし白馬よりつるものとも
ありそなたと書とる字もたのむやむし此
誹諧の歳目より天長也。地と所折の所折の
事よりみちをらふ事あり神又みんかみん
十八の地字とてあはれし世の。に天長の所折も
知されし書目より地字とて入る事あり河原の事
よりたときより天長地元の熟語とてして中
と地よりと不祝美ありんかみんかみん河原の事

本に鶴鳴ちる堀の事し子田井の事なり
かきもあらしとてかきもあらし河原の事
の事しとてかきもあらし河原の事なり
約子の河原の事とてかきもあらし河原の事
字もたのむ事あり
宗近 建礼の所折より宗近といふ能書の名なり
きし能しとて早し後をいふことし能の事あり
宙の事ありしとて早し河原の事ありしとて後を
いふ事ありしとて早し河原の事ありしとて後を
いふ事とて早しとて早し河原の事ありしとて後を
の事折る事し河原の事ありしとて早し河原の事
の事折る事ありしとて早し河原の事ありしとて後を

河原の事

河原の事

とあるなり或と臣間の俗語とありて下に五人傳の義
も及び長上もあれども減なり宗近のなる此奥
かまゝに彼より二義の上よりあれやれよとに
折々の能とあけて且も及なりとあるは宗近の
いかにわたり河あやうえいといはれりやと
くらに類回信而不能及子貢敏而不能識子
路勇而不能怯子張在而不能同子貢子路
之有以易大易吾弗與也此其所以事吾而弗戴
也大哉孔子の宗近なる情くましくあり
し間々一義とありて名とありて高の次
りあけし秤の目とも名のりなり子貢のを録の
やうにありとあり宗近のたよりあり捧ぐる人

例、
買のつれし丹有い馬のかけいといとあるなり
此より多義のや用とありて例の二義の
ありきといひ能くしもつれりありといひ
よめあんと一れよ宗近にあらむといひ
按する宗近の二義の録ありありといひ
一宗の和尙とれり詞あり
一節一節とあり論の常法あり一和對あり
節ありとあり一道のとれりあり一れり
るのありとありとありとありとありとあり
偏擔とありとありとありとありとあり
論結とありとありとありとありとあり
宗近の二義のや用とありとありとありとあり

宗近

五

教化秘す 白馬教誡訓なるも儒佛の教と
了ん内秘外理の二相ありて新加孔子も
言ふを悉くしをばに履きてををををを
一乃のそ地と説のいす今と言語の類い
てたれをいすといふやふいおまはま
はに履ても愛てもあるも也とい懐の我
はるるすありやより儒佛の力差人と作ら
ざるもあまを人と迷はるるあるをこと業
明眩といつりたれを新加孔子の智慧ある
守んもも信んといふこと子疑一決の府
ありしにわが教化の秘すといふをくす人の
ありく教のいを要通せし方あるをいす人の

ちるもいす速ありはると大悟といはは
と放下といふ一例といふのさういふ一
と何する一といふむも大徳の常禪所といふ
即心即佛の言下に何する非心非佛の釣語
もしも一這老漢惑亂人未有了目こそ
の馬祖と老菴といふと即心もあむ非心
あつても履ても愛てもあるも也とい懐の我
はるるすありやより儒佛の力差人と作ら
ざるもあまを人と迷はるるあるをこと業
明眩といつりたれを新加孔子の智慧ある
守んもも信んといふこと子疑一決の府
ありしにわが教化の秘すといふをくす人の
ありく教のいを要通せし方あるをいす人の

白馬

白馬

新撰

十

今ところ十町と申すは、
世に業に申すもやも、その御傍
深云ふと、伊勢の傍思ありて、
城の北にありて、第一の庭を電ら、
向ふりて、
のふおれ、
さる、
人と、
の向にありて、
あり、
のふ、
まうらに、

の又されと、
歳と、
いに、
と、
と、
と、
と、
と、
と、
と、
と、
と、
と、

新撰

十

頁字式の如くいれとあげていさくに新の差
不と辨とて去種とて子象物のあうて竹本
も書いさうなると若賊食服のあうて
い辨用の差ふあり支射とて詞の辨あり
或と名取物各と同字別吟の取はるべき
準法の二より転向と句作との差ふとてけ用
と不用とのる段とらぐ一四式のいぐ文字を
さうむいさうきとて一極極一柳腰のいさ
の牛一必の鹿馬のいさく一居所一筆の家名
のいさうきとてい打懸もも人よりいさう
て用控も一たれい高下りいさうむいさ
たれと波書法の差ふい中詞の牛一同一之れ

とも必の鹿馬とてるの波ありいさうもたれが格別
いり転向より用ありい句作より用ありい
さうむい一指書とらうていさうの同字とてれ
していさうの波濁いさうきとていさうか
たあり数字も送字もいさうより轉一さう
一不盡いさうのいさうとて路路の拍子の耳より
い二句い下とていさうむいさうとていさう
物名も録廉一麻のいさうとて屏風一松のいさ
偏う書いさう字形とてい直其名い假名をいさ
あうい附向も打懸も用控の波ありい松を
いさういも假名いさうけいさういさう
いさういさういさういさういさういさう

鳥書抄

七

ことばとて同字と同意の誤りて松風と風流家
 のことばとて旧式より同字別以ちありはれがらき
 と假名よがらと執子のたさきとてありあり
 畢竟とて此式めるたとまり二巻の書に以
 ちり諸路の拍子とまり針と指合とて去掃と
 して新川のばとあつたさきとてたさきとて
 あんけいけ論との眼の所とてさきとてたさきと
 するいとくんとてたさきとてたさきとてたさきと
 海とてたさきとてたさきとてたさきとてたさきと
 ことばとてたさきとてたさきとてたさきとてたさきと

二見文世玉圖

鏡板

長一尺九寸五分
 横一尺一寸
 厚四分五厘

板足

高一寸五分
 横一尺六分
 厚四分五厘
小口埋木上にお形ニ
但ヒラ共ニ九メナ

足、ひきこ

小口ヨリ
 見付ヨリ
 横一尺一寸五分

足、代あき

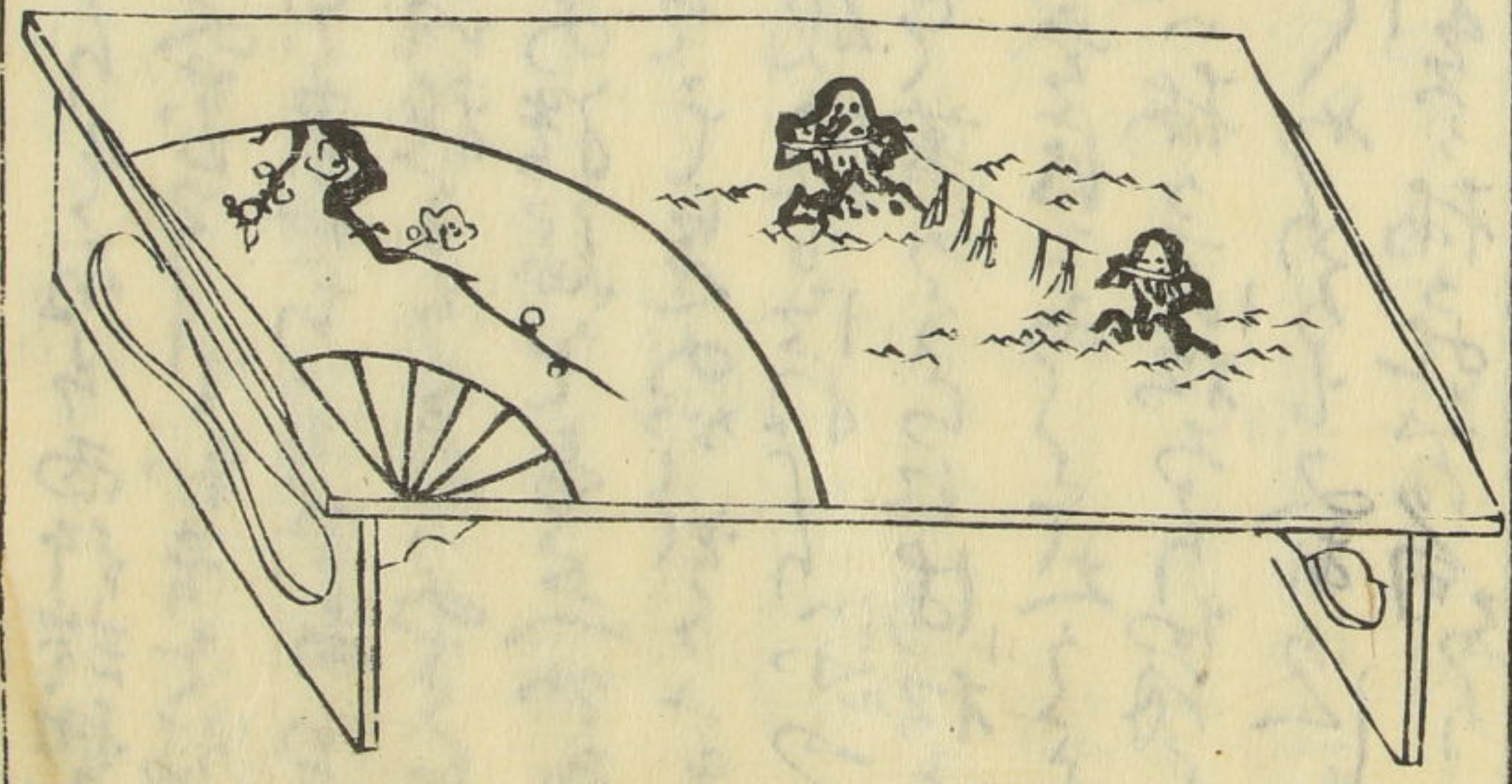
横一尺一寸五分
 長八寸五分

足、海嵐

中程
 躰先一寸五分

足、ひきこ

埋木ト重ニ中ニ二寸五分ニ
小口ノ下ニサ程ニテ次ニ
フケケツケ跡先ニ五分
市ト八鏡板トミナリ



け圖と芭蕉家の抱おきちりそら西行談抄
二人の浦上佐のり比嘉と文かき一和音と協
そのほつら一とくくあら東世ちつそあ
つた文とすまこおあるり一和音とつたあ
とうきやうたきやうたねの浩縁とまこつた
けつ形の用とまらあらそ定のかか
そまらひくわら地より一破綻もはね
よまのたえとあつらつと蓋めららばね
結とつたけりられと改義のまはあつた
あつたやうと一扇の持の梅うあねちり
その他よつた言辨あねあさくやうらし又あ
中比より先作のさうとあねあさく梅はあ向あり

諸抄法式 貞享式の五條の下に三條の法式し
了るより一連えの和歌より文書の上此
設あり一巻の法式し了るより折し月花の
控より指舌去嫌の設ありしれり一巻の
法式しおむねの抄よかりねい新家の新式
まらしたるそねとあねとまらね二條の復し
家道の習律とつたなすそりの調子の執事
りあしよれいまに執事の一條と奉り貞享
式の大むねと辨と一條と執事の連えし向
とうけとるけら作者のよとさけて所向と
まらのお向と一奉り一作者らああ
まらり中音に附向とつた時よ執事へ家近

あつた

あつた

いさくといそきたり一ちて字近のむく今
とくあふあふやうらたの向とて一筆一
或ら又一とあふ府中一むく一の附向と筆
てたのち懐席にあと一遠近一とて
すまらるるうらたあふ向と附向と二向
一むく一府中一打鼓とてあふらあふ
靴子の向とむく上に向の息とてあふ七
りあふといはけして一むく一むく一むく
よと切一むく向讀のとてむく一むく一むく
意あふ一むくむく又條のむく一むく一むく
代式あふ一靴子のむくむく一むく一むく
一條と辨てを余の論中一教在とて

之石 拙ららん山名集一盧思道一執言といふ
て不字者使飲墨汁之中一と東城集一
前云一誣語といふて純灰之斛の語ありと字
いおのむく一ちらん

儉約 一字録の連綿篇一たの能階のふはとて
秋迦れ子のあふとてむく一むく一連歌のむく
とあふ一むく一むく一むく一むく一むく一むく
一儉約とて人とあふむく一謙退とてむく
のふ章へかあふとてむく一むく一むく一むく
物一むくのむく一あふ一何のむく一むく一むく
そむくむくむく一むく一むく一むく一むく
誠一と録のむく一むく一むく一むく一むく

のむく

のむく

町屋の妻を通とちかきくさきくさ
 裏一頃 一巻の式月より韻の妻一頃句を
 せよとてやく我句と階(まことあひの
 とく小儀式の年より花と主人へらむゆへ
 花の作れぬあひさのあり妻と花とらぬ
 けと花の種と人よゆつる意せぬもまね
 とあつとれんをさむとせられぬれぬ
 宗匠居間一巻の式月より階の交席へさむの
 善海より二角之間ちり論あり一箇あり
 屏風上座より宗匠も連る威儀より論と
 しくしおんの方へ代句とて一頃とやく階へ
 當方の二頃より新古と論をさ階合のさぬ此

五條式

やまのあつらへ響應の波舟のそらりあつらへ
 一 諸れ停止
 一 小語僅あり
 一 出合遠近
 一 一句一直
 一 月花一句
 ちり四式と増減して貞享式の條同ありけり子句
 の二條あり自句二連と二連と連るのさかひり
 へきあり万句と子句のけりかきも十百初とあつら
 一 一巻の差あり一巻くより韻の式せえれ
 一 一巻の二巻と去嫌の用終とある一はて四式のち合

遠近と云ふに但存、先と云ふ書あれし、其後の心は
結し、時とあれ、遠近の心と云ふ、一月花の二條
も、四式、香、月花とあれ、香と云ふ、八を、花と云ふ、
月と云ふ、一と云ふ、月、の句と云ふ、月、向、月、と云ふ、
解と云ふ、も、存、と云ふ、決、して、可、ち、る、一、子、向、万、向、の、一
解、と云ふ、月、花、の、月、花、も、分、隔、ち、た、百、約、の、一、方、と云ふ
も、は、式、の、例、の、や、も、よ、方、に、よ、り、一、か、く、は、不、毎、の
時、も、あ、ん、ま、ね、と、一、度、の、は、ら、お、ね、む、ね、た、式、と、は
める、一、く、一、卷、の、控、と、云、式、の、書、ち、り、も、あ、る、に、一

傳田

香、心、月、送、稿、秘、説、と、香、園、の、句、評、の、下、に、祖、存
の、遺、訓、と、あ、げ、て、秋、季、に、早、月、お、の、説、と、香、心

と、二、花、二、月、の、心、あり、を、訓、の、大、略、と、む、い、う、り
る、心、の、は、ら、と、み、す、約、の、配、と、して、二、花、と、月、の、控
あれ、と、大、く、と、二、花、二、月、と、云、う、り、一、を、あ、る、と
書、え、る、の、香、向、と、云、又、向、月、に、月、と、して、七、句、月
と、して、秋、と、は、ら、け、重、の、七、句、八、句、と、して、又、く、月、秋
と、は、ら、け、花、も、む、つ、う、く、花、お、の、秋、と、は、ら、け、
と、して、書、え、る、香、向、と、云、表、と、雜、と、き、く、一、句
あり、り、ら、秋、季、の、香、向、と、云、花、の、心、と、遠
と、は、ら、折、返、の、あ、ら、う、と、云、又、冬、の、月、と、云、
と、は、ら、折、返、も、美、の、お、と、云、と、云、う、り、
の、香、向、の、心、と、云、折、返、の、七、句、同、と、云、
と、は、ら、折、返、の、心、と、云、と、云、う、り、

きしひ四式の後とくもかてくれちらへ用持して
一とれ我が家の音韻式は二月のやとて二カ
うしんうむしと連音の式とくも百韻の月
と八あきとくも名持の裏のせりてれんとて
宗祇一勅免あるとてやせれの大例は
時々不用のほたもあつちやとせはれと
あきながくついで連而不作の例もあはれ
後君のほたとくも一とて他とておのやな
あきの感なとて年一とてせれの音韻式も
ありとあり海一秘とて説ちるとや
大和凡躰 假名韻府の畧文にじうしんうむし
の音韻とていへんキムフとへの差ふあはれとて
つう音韻と

うふ通ひの音韻とて通ふはて論とて
つうしあもあやあうれあつ。はむし。のしき
い假名の孫文とてるあしとて和音の書はよ
あけこれ假名の音とてやうとてあつ。あ
はむし。とて一とてや字内の入あはらる。あ
とちあし。とてあけいちうとてあつ。あ
あしとて今のつうしあもあうれあつ。あ
あしとて一或とてあき。あきとてい或とて
あしとてつうかきとてあき。あきとていキと
横の韻ちり。とてあしとて韻府のいあし
漢語と通とてあしとて音韻のほた。推量
とてあし。今も定家の假名はつとて一とて

あしとて

あしとて

書あねも取の一事をあれは柱とていふは
なり漢土の字書とてふるは音韻との通
用あれは上は用ゆりねとのれの中は用ゆりえ
へのれも下は用ゆりやがら句端としてかきけ
るるともなりやうららるともなり假名はけ
のたよりとてふるもなり一はた書は和詞
の本推して物子菴の秘行なり
之書 繪本おしおお醋吸の係の歌文ありれ
へ醜いとてい新加ら申すといれ老子へ言ひし
るの心直く方候し異見し此之説とて漢の
大道の妙用なるなり一虚ありて多あり
申酸若辛にあてりてとるくをりてよくえり

例にあくの一節をかきくのた末世のほ右に
くりては儒内は姓善村悪のほ右も仰ふ
自力他力の議論も万は例の二れとて自己
一方の脈とていふとていふの物候あり力ありや新
もれ子もい所のほ右あるとていふ能潜の二節
とていふ詩歌連言れふなり一節して道は建立
のそとありといふ何と虚して談笑と
ち何と笑うして過當とていふは漢の武帝
百世のめをかり東方朝とていふれはこれ
と大名の加しつれ子の言説とていふ諷諫
ともいふべきや今の有力の権那をい一道
建立のほ右とていふ鞠や揚弓の九段一得と

もきく、軒弓、誹諧とくせし、温厲も知、即ち
酸の耳、耳、隣、の談、美、す、於、く、今、より、一、節
の要、文、を、辨、表、の、骨、切、り、扱、り、て、一、
大、要、文、 拙、も、る、ん、春、秋、の、二、對、と、十、論、一、部、の、内、記
といふ、れ、孔子、の、十、論、の、こゝ、に、春、秋、の、傳、長、賤
と、用、あ、れ、し、し、知、然、と、罪、我、の、會、教、と、は、け、く
い、そ、う、に、世、間、の、機、嫌、と、宥、親、の、達、才、の、禪、と、十、論
の、こゝ、に、古、來、の、比、式、と、破、あ、ら、し、く、神、の、標、如、と
二、祖、と、は、さ、さ、て、い、そ、う、に、心、の、血、脈、と、を、あ、ら、せ、し、
い、儒、仲、の、秘、訣、と、い、て、多、く、要、と、皆、の、表、裏、と、其、
と、ら、ん、や、鼻、毫、と、い、け、對、の、意、を、親、々、神、子、の
荏、弱、と、こゝ、に、さ、さ、さ、し、て、い、そ、う、に、た、ら、し、き、詞、の、い、ふ、も、多、

い、恩、参、の、あ、ら、ら、し、き、も、一、け、な、し、十、論、も、十、一
條、の、要、文、と、あ、れ、し、論、者、と、世、對、と、大、口、訣、とい
評、者、と、世、對、と、大、要、文、とい、ひ、辨、者、と、世、對、と
老、婆、親、切、とい、ひ、一、密、院、の、子、の、才、之、後、あり
變化、撮 白、馬、教、誡、訓、の、變、化、と、い、ふ、は、此、の、意、あり
こゝ、に、一、虚、に、變、と、あ、れ、ん、變、と、い、ふ、撮、と、一、實、に
變、と、あ、れ、ん、虚、と、い、ふ、撮、と、い、ふ、は、伊、尹、とい、ひ
比、干、と、一、上、在、の、事、と、天、理、と、い、ふ、管、仲、と
比、干、と、一、下、在、の、事、と、一、伍、晉、と、い、ふ、は、一、撮
と、先、小、と、い、ふ、と、一、變、と、通、す、方、の、用、と、い、ふ、は、一
け、な、し、儒、仲、の、連、綿、も、そ、の、を、對、の、變、と、一、通
て、比、し、式、と、い、は、し、る、に、お、し、る、は、い、は、し、る、に、お、し、る、

之界一音 先師のたれくの讃は是非段の難凍
ありて段の詞へ是ちり時いふあとい非ちり時
うらむとととたはるかた儒師の孫とりのい非好
一人の自執あるんしてててて語の大畏れよけ對と
作者の者のうして好色の一段よりたれくい毎
てけと地とまるるへちねをも非のあくらちの
や道の教うしてとていふもやうに言のたれと
天下万民の耳目とてくくたも大道の教はあ
その理とくくう人ともあて是ちり付比
といと非ちり付しうらむとてい 一々の節よは説
のい尼も入道して之界の通とたれと一音の非
といとりあはる潜誓のたてあむとて談言微中の

賛しわらうてはたれ儒師のぼは遠とりのい
もくうくもまるともあはれは凡衆の罪人
とていまにわりのたれくのたれもとのたれと
やちりくもい今の論も儒師のあはてて
微言といやちりく何れは凡衆のたれと
儒師のたれといむともあはくや道のたれと
たありと師地のい秘介現といふくも非好
くむいさふとたれりの談英の記諫といま
へん此の和とたれと也まうて論の過言過語
とていも一ると建へて地うて言法時の権
重あはるく知言とるくの高用うて
能記とて格物のとてちりく

の界一音

の界一音

け道論師 遺稿を話さむらうり儒書に仲孫也
門人の撰集しうらうり度あり然れども中り也
釈迦の十才も孔子の十哲に似て疑向とて
て代と既して人と利をむくもるに似るに
類も又あけさくれらうらむよて字を記さる
よそらうら時の変え通さるべき、我々の境
ありらうら位名の方よりいれ釈の虚活と
き(釈の場をいやうられ儒家と文解とや
偏居の親にうらうけは一字録う世界の善
悪に優劣も互らうの物ある釈迦の孫ら
孔子の書も西のいれ何れいんらうら
しれらうら用あることとある(一)字

例の二取ちるとしてさうらうの書に
いれらうら小見らうらとあるは
の疑うらと仲孫の釈その
太子の托胎も今人のいれと
應にのいれとて例に撰る
あうらや儒書に論孟の
はる達し自撰化撰の論
の説らうら右論者出れ
と齊論も篇の増減へ傳
て論記も中前の自撰と
二弟の對向も夫子の
曾子と述りも子游子
其れ文字

の書に

子

片のりて言詁の交とつむる時おほく解を才
一の類回とて信而不能及とて仰行の教誡の
秘よりりて詞の釘とておほく論詔の
虚を自在に有る曾游其の也仰とて
とて或や篇章の断続とて或は一章二章と
命とて或は世の諷諫とて或は或は或は
之章四章とてけりて子者有の諷諭といはる
不あり或は子回へ衍文ある一段と二章ある
不もありなれとておほく論詔とて或は陽詔も
断続も文章の比よりて春秋とて夫子の筆格
ありとて或は文章とて教誡も一向とて或は
ありがてき不ありとて六章と七章とあるをれ

を和漢の注を達し増のめりる起ちんもいぬ
はくは傳ふの藤字より篇章の次第と失る
う他とて或は用りてけりて不用ある夫子
之文章可得而聞夫子之性與天道不可得而
聞とて或は或は或は或は或は或は或は或は
此二篇の断続といひ同尚異各の要通の科
も十哲も或は不あり論詔とて夫子の自撰と
決とて或は或は或は或は或は或は或は或は
子へて或は或は或は或は或は或は或は或は
對向して或は或は或は或は或は或は或は或は
或は或は或は或は或は或は或は或は或は
て子者有の學道とて或は或は或は或は或は

論詔

或は

今より考へては文章の優劣を述べたは遠くして此編
に於ける急用なれば儒者いふ孔子孟の書
は這箇の眼力ありしより一や二や白馬の
文致も文章と今日の世に用ふもあらずして教
誡たる世の有用とすまれば説くは拙
るればと論るるに聽者もこれを信ぜざる
は名のためしむるに知不足なり我れもや
小人も拙るるまされいねしつれなきのよのあや
とまよふやいふ念の非と後念ありては
自己とありしむるを大言ともしい世を
徳ありとす思ふのいふと孔子のたはる鑑
と一論語は孟子の詞ありとや一撰者の言

とるやと孔子の周制とまはるいあう刪詩正樂
言ふはは種もよらの世にけつり論語とい
くらの過ありて自撰と改のいあう孟子の
韓氏と評のこしく万章公孫と塩梅を加して例
の似而非ちりあくと決して他撰といふをあり
たむねれ孟の勝者と自他の撰論とあるとせ
その一末世の儒書もはる文も程子の夫子はか
疑りくかりて其後世の古文のいふは高唐人
の撰ありとんと味もなるを板りて我れ
学者のりやあつらひわん撰おと埒のあわく
と金一撰者の廉おとん、そのらるる中の子
と一庭訓の次より古文大字あれはれりの撰論

のたあ

と

とありしその一書は悉く古人と信せしむ
言説は中比の儒佛存も古宗新宗の視所
の書も歌書軍書の花とてくちる源氏に
の十帖も中比の儒佛存も古宗新宗の視所
の書も歌書軍書の花とてくちる源氏に
いふ文ありていふ源氏に
も上之篇ありても軍書とてくちる源氏に
甲陽軍鑑のてきと高坂の書新し信
玄とありていふ源氏に
いふ天下の七雄といふとありていふ源氏に
自在ありていふ源氏に
とありていふ源氏に

とありしその一書は悉く古人と信せしむ
言説は中比の儒佛存も古宗新宗の視所
の書も歌書軍書の花とてくちる源氏に
の十帖も中比の儒佛存も古宗新宗の視所
の書も歌書軍書の花とてくちる源氏に
いふ文ありていふ源氏に
も上之篇ありても軍書とてくちる源氏に
甲陽軍鑑のてきと高坂の書新し信
玄とありていふ源氏に
いふ天下の七雄といふとありていふ源氏に
自在ありていふ源氏に
とありていふ源氏に

天保
四年

儒佛の二教とむじまひくはと詠言の微中
とと詠言の詠諫ともある

于時享保己歳之月中旬院

書林

京寺町押小路橘屋

野田治兵衛



天保
四年
五月
十日
野田治兵衛

